

急激な環境変化における検査技師の適応とレジリエンスの考察

◎岡部 寛央¹⁾、山口 千佳¹⁾、尾方 一仁¹⁾、草野 睦士¹⁾、山口 真希¹⁾、川内 匡¹⁾、篠原 弘文¹⁾
長崎労災病院¹⁾

【はじめに】

近年、当院検査部の職場環境は急激かつ多面的に変化している。主な要因は、世代交代、新型コロナウイルス感染症の流行、病院経営の厳しさである。こうした望まぬ変化やストレスに直面する機会が増え、安定した環境に慣れていた職員にとっては適応が困難な状況が生じている。この環境を乗り越えるには、変化に柔軟に適応する力、すなわち「レジリエンス」が極めて重要である。本演題では、当院検査部における変化の経緯と、それに伴い私が経験した業務の変遷について報告し、得られた考察を示す。

【病院・検査部の変化】

2020 年：新型コロナウイルス感染症の流行により、微生物検査部門の業務量が増加し、技師を増員した。

2023 年：乳腺エコーの導入に伴い、検体検査部門から生理検査部門へ異動。検体検査部門の疲弊化により、検体検査と微生物検査の一体化が進行した。

2025 年：病理検査部門の技師の予期せぬ退職。病床数削

減により技師定数も減少し、人員補充も困難となり、検体・微生物検査部門からの支援体制を確立した。

【私自身の業務の変遷】

微生物検査部門の増員に伴い、病理検査部門から異動した。その後、検体検査と微生物検査の一体化が進み、細胞検査士としての資格を活かし、一般検査の兼務も開始。また、病理検査部門の技師減少により、再び病理検査も兼務し、現在は微生物・一般・病理検査の3部門を担当している。

【まとめ】

検査技師は一般的にスペシャリスト・ジェネラリストに大別されるが、その前提として、職場の状況を的確に把握し、率先して業務を担い、円滑に遂行できる「レジリエンス」を備えた人材が極めて重要であると考えます。私はまだスペシャリスト・ジェネラリストいずれの領域にも至っていない中堅技師であるが、職場の安定化に貢献し、若手技師の模範となるよう努めていきたい。

連絡先：長崎労災病院 中央検査部 0956-49-2191

検体検査部門における臨地実習の取り組み

◎佐谷 純一¹⁾、瀧野 亮太¹⁾、鋤崎 愛稀¹⁾、福山 修治¹⁾、永野 祥子¹⁾、溝口 義浩¹⁾、宇野 大輔¹⁾、緒方 昌倫²⁾
公立学校共済組合 九州中央病院¹⁾、学校法人 純真学園大学²⁾

【はじめに】

臨地実習において、当院検体検査部門では実習生が日常業務に積極的に参加するカリキュラムを用意しており、午前は業務を施行し、午後は各分野での研修を行っている。また当院は県外を含む7校から年間約15名の実習生を受け入れていることから、指導に様々な工夫を行っているので、今回その取り組みを報告する。

【実習内容】

検体の到着確認、遠心分離、検体架設、試薬・消耗品の補充、各分析装置説明、機器メンテナンス、内部精度管理実施、検査結果確認、血液像鏡検、尿沈渣像鏡検、髄液・穿刺液検査の説明、輸血関連検査実施、入院患者分採血管準備、パニック値運用の説明、課題としてパワーポイントの作成。

【現場の取り組み】

多くの実習生を入れ替わりで受け入れるので、学生指導内容のマニュアルを作成。また、検体到着の受付漏れなどの対策として検査システムの改良を実施。技師が実習

生への指導が困難な隙間時間用に教育スライドを用意。実習生に考える力とまとめる力を身につけさせるために課題のスライド作成～発表を実施。実習終了後にアンケートを実施し次年度の参考になっている。

【考察・まとめ】

多くの実習生を受け入れているが、様々な工夫を行うことで現場技師の負担増にはなっていない。また実習生を指導することで現場技師のレベルアップに繋がっている。アンケートの結果でも実習生の満足度は高くなっており、当院への就職を希望する学生が多いことから実習の効果が現れていると考える。今後も現場の技師と実習生のモチベーションが上がる臨地実習の環境を整備していきたいと考えている。

連絡先：092-541-4936（内線：3266）

臨床検査技師等がコロナ禍に実施した検体採取等の技術については、継承が必要である

◎森屋 一雄¹⁾

佐賀県健康福祉本部 健康福祉政策課¹⁾

臨床検査技師等がコロナ禍に実施した検体採取等の技術については、継承が必要である

【目的】

コロナ禍に保健所等で実施した咽頭ぬぐい液採取技術について次期パンデミック発生に備えて継承することを目的とした。

【方法】

コロナ禍においては、患者周囲の濃厚接触者について、感染者の早期探知のため保健所における検体採取（ドライプスルー採取など）や社会福祉施設（保育所、高齢者施設等）、学校等へ出張検体採取を実施した。今回そこで得られた採取技術、会場設営準備等を次世代に継承するため、各保健所から検体採取資格を持った臨床検査技師、保健師を対象に研修会を実施した。

研修は、解剖学、実技の講義、人体模型での採取デモ及び被験者同士での採取を行った。

【結論】

コロナ禍において検体採取機会の少なかった者（別業

務担当で実施していない者、コロナ禍ご入職した者）としては、大変有意義な経験であったという感想がほとんどであった。

新興感染症については、今後いつ発生するかわからず、そのためにコロナ禍で経験した様々なノウハウを継承することが大事だということを改めて認識した。

このような研修は、次年度以降も新規採用職員等に定期的に実施し、経験することが大事である。

また、患者への問診、濃厚接触者の特定など「積極的疫学調査手法」などの継承も今後の課題である。

連絡先 0952-25-7565

当院における新型コロナウイルス遺伝子検査の振り返りと今後の遺伝子検査機器の活用

◎伊藤 将大¹⁾、湊 水希¹⁾、上田 真美¹⁾、井上 由美¹⁾
社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院¹⁾

【はじめに】新型コロナウイルス感染症は2019年12月以降、急速に全世界に感染拡大した。この流行でほとんどの医療機関に遺伝子検査機器が導入され、新型コロナウイルス遺伝子検査は一般的なものとなった。しかし、2023年5月8日に5類感染症へ移行後、遺伝子検査件数は減少傾向にあり、遺伝子検査機器の活用について変遷の時期を迎えた。この現状を踏まえ、当院における新型コロナウイルス遺伝子検査の実施状況を振り返り、今後の遺伝子検査機器の活用について考察したので報告する。

【保有機器】当院は現在、LoopampEXIA（栄研化学）3台、Autoamp（島津製作所）1台、GeneXpert（ベックマンコールター）2台、GENECUBE（東洋紡）1台を保有している。

【遺伝子検査機器の活用】2020年4月から2024年12月までの月別・年別新型コロナウイルス遺伝子検査件数の推移と機器別の検査件数を調査した。2024年6月より結核菌群・MAC核酸同定検査を外注検査からGENECUBEでの院内検査に移行し、検査開始から2025年4月と前年同

期間の検査件数について比較した。

【結果】月別では2022年8月4835件をピークにそれ以降は減少傾向にあった。機器別ではLoopampEXIA 48203件、Smartamp 970件、GeneXpert 19676件、GENECUBE 11340件であった。現在の遺伝子検査機器の使用状況はLoopampEXIAとGeneXpertに2極化していた。また、結核菌群・MAC核酸同定検査の院内検査移行前後の検査件数は、結核菌群：移行前が155件、移行後が153件、MAC：移行前が88件、移行後が131件であった。

【考察】2023年5月以降、新型コロナウイルス遺伝子検査件数は減少傾向にあることが確認できた。また、院内検査に移行した結核菌群・MAC核酸同定検査の検査件数は移行前と比較して横ばいであることから、院内検査への切り替えがスムーズにできたと判断できる。今後も導入した遺伝子検査機器の更なる有効活用のため、臨床側とコミュニケーションを図りながらニーズに応えられるよう努めていきたい。

【連絡先】0956-33-7151(内線:1184)

当館の免疫抑制剤投与患者における CMV 管理状況の解析

◎萩尾 修平¹⁾、田中 ひかる¹⁾、西野 達彦¹⁾、百田 裕香¹⁾、牛島 浩子¹⁾、松田 知子¹⁾、新開 幸夫¹⁾、松下 義照¹⁾
地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館¹⁾

【はじめに】サイトメガロウイルス(以下:CMV)は免疫抑制治療による再活性化が問題となり、患者のモニタリング管理が重要である。当館では CMV 抗原 C7-HRP(以下:C7HRP)を外委託しているが、2023 年 4 月より迅速報告を目的に CMV-DNA の院内測定を開始した。今回、免疫抑制剤投与患者における CMV 管理状況を後方的に解析したので CMV-DNA 導入効果と合わせて、報告する。

【方法】2021.4.1～2025.3.31 にタクロリムス、シクロスポリン、メトトレキサートを投与された 599 名を対象とし、CMV 管理状況として C7HRP、CMV-DNA 検査結果及び治療薬投与状況を解析した。対象治療薬は、館内採用のガンシクロビル、バルガンシクロビル塩酸塩とした。

【結果】対象患者 599 名中、CMV 検査人数は 170 名、検査実施率は 28.4%だった。診療科毎の検査実施率は、血液内科が 58.9%(142 名/241 名)、他診療科は 7.8%(28 名/358 名)であり、差を認めた。検査方法別では、C7HRP (2021.4.1～2025.3.31):検査人数 100 名、検査件数 858 件、陽性率 12.6%、平均報告日数 2.50 日、CMV-DNA (2023.4.1～

2025.3.31):検査人数 70 名、検査数 1052 件、陽性率 41.8%、平均報告日数 0.04 日であり、CMV-DNA 導入による報告日数の短縮が確認された。CMV-DNA 導入前後の治療薬投与患者数はそれぞれ 23 名、39 名、平均投与期間は 23.2 日、22.1 日であった。

【考察】CMV-DNA 院内導入により、平均報告日数は短縮した。報告日数の短縮は患者の厳密なモニタリング管理及び治療薬投与管理に寄与したと推察される。解析結果より CMV-DNA は C7HRP と比較し、陽性率も高く、早期治療介入が可能となった。一方、免疫抑制剤投与患者の CMV 検査実施率は 28.4%であり、血液内科以外の診療科は 7.8%と低いことが判明した。今後、検査実施率の向上には未実施者を拾い上げる体制の構築が必要と考える。

【まとめ】当館の CMV 管理状況を後方的に解析した。CMV-DNA の院内導入は患者のモニタリング管理及び治療薬投与管理に寄与した。診療科毎の検査実施率には差を認め、今後、検査実施率の向上が求められる。
連絡先 0952-24-2171(内線:1681)

当院検査室における心臓超音波教育と精度向上への取り組み

◎柴原 明日香¹⁾、一村 健一¹⁾、池上 新一¹⁾
社会医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院¹⁾

【背景】当院臨床検査室は入職時 OJT 教育を ISO 教育管理チーム主導で行い、各部門配属後は部門内主導による教育となる。生理検査室の心臓超音波(UCG)検査件数は年間一万件を超えており、全超音波検査件数の約半数を占める。UCG に携わる技師は 10 名(超音波検査士 7 名)であるが専従ではなく、その他生理検査業務に加え採血や夜勤業務も担当しており、新たな UCG スタッフの育成が急務となっている。今回、新規教育に加え、現スタッフの知識向上を目的に当院検査室が行っている取り組みについて報告する。【取り組み】教育担当者は他の業務の兼ね合いもあり日替わりとなる。研修チェックリストを基に進めているものの、超音波検査は画像判断に知識量や経験の差、画像描出には個人の技量が影響するため、どの時点で次の段階に進み、最終的に研修終了とするか判断に苦慮することが多かった。そこで経験豊富な超音波検査士を教育リーダーとし、進捗確認を一元化したうえで月 1 回のカンファレンスで研修者の現状を報告するようにした。これにより教育の進捗状況をスタッフ間で共有

でき、異なる担当者であっても研修者のレベルに合った指導ができるようになった。また、2023 年のレポートリングシステム(LS)更新に伴い、全ての UCG 検査は循環器医の確認が行われるようになった。技師が検査施行し報告書作成を行った後、循環器医により改めて画像読影が行われ超音波診断が成されレポート確定となる。その際、検査者に伝えたい点があれば、コメントを LS 内に記載するように依頼し、検査者にフィードバックされる仕組みとした。また、月 1 回症例検討会を行っており、経験した症例を要員に共有している。担当者は経験年数問わず輪番制とし、スライドを用いた症例提示を行う事で、知識向上はもとより学術経験を積むうえでも有意義であると考えている。【まとめ】UCG 教育リーダーを指名したことで、リーダーを中心に進捗状況の把握ができるようになった。スタッフ間で共通認識を持つことで教育は段階的な計画を立てて指導することができるようになり、教育を円滑に進めることができる。また、症例を共有することは全スタッフの質の向上に繋がっていると考え。